

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	BALASOORIYA MUDIYANSELAGE MENAKA CHANDANIE BANDARA HINDAGOLLA
学位	博士(学術)
学位記番号	新大院博(学) 第80号
学位授与の日付	平成 27年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	Research for Improvement of e-based Resources Utilization in University Libraries in Sri Lanka: User investigation and application of integrated model of Technology Acceptance Model and Flow Theory (スリランカの大学図書館における電子資料活用の発展に向けた調査研究: 利用者動向調査, 並びに TAM と Flow 理論の統合モデルの提唱)
論文審査委員	主査 教授 中村 隆志 副査 教授 原田 健一 副査 教授 中村 潔 副査 教授 山口 芳雄 (新潟大学自然科学研究科)

## 博士論文の要旨

MENAKA Hindagolla 氏の学位論文 ”Research for Improvement of e-based Resources Utilization in University Libraries in Sri Lanka: User investigation and application of integrated model of Technology Acceptance Model and Flow Theory” は、スリランカの3つの主要な総合大学の学部学生に対して、大学図書館の電子資料と電子図書館の利用実態の調査を行い、TAM(Technology Acceptance Model)とFlow Theoryを統合した構造方程式モデルを用いて、アンケート結果を分析し、学生らの利用意向を明らかにした上で、大学図書館の活用を推進するための提言を行ったものである。

論文の構成は以下である。

- 1 Introduction
- 2 Conceptual Review
- 3 Contextual Background
- 4 Theoretical Background
- 5 Theoretical Framework
- 6 Research Methodology
- 7 Data Analysis and Discussion
- 8 Summary, Conclusions Recommendations and Areas for Further Research

議論の骨子は以下である。

第1章では、研究の背景、問題意識、研究の目的と対象、Research Question、図書館からの取り組みの必要性、国家(スリランカ)レベルでの研究の必要性を整理し、本研究が貢献できる事柄の範囲を明確にしつつ、本論文の構成と章立てについて説明している。

第2章では、EIR(Electronic Information Resources)とDL(Digital Library)について解説した。EIRとDLの歴史、理念、定義、仕様の拡がり、図書館への普及、インターフェース、スリランカ国内における活用実態、期待される機能について概説し、現代の知的営為の中での意義と役割を整理している。

第3章では、スリランカの実状に目を向け、スリランカ国内の図書館行政、高等教育行政、情報化の取り組みを概観した。大学図書館における資料保存と収蔵状況、データベースの作成と閲覧可能状況、大学図書館における学生の修学状況とそれをサポートする図書館の役割と新しい取り組みについて、詳細に解説しつつ、その活用実態について問題提起を行っている。

第4章では、図書館利用者の動向を理解するための理論モデルとして、TAMとFlow Theoryの2つの理論について解説した。両理論において、その前身モデルから改良を重ねた最新のバージョンまでを網羅的に敷衍し、その長所と有効性を整理した上で、2つの理論を統合したモデルの可能性に言及している。

第5章では、前章で呈示したTAMとFlow Theoryの統合モデルで用いる構成概念の解説と、分析で用いるResearch Hypothesesについて詳説した。過去の両モデルで用いられた構成概念の応用の系譜を辿った上で、本研究で呈示するモデルに用いる仮説の妥当性を述べている。

第6章では、調査方法と分析方法の各プロセスを詳説した。予備アンケートと予備インタビューによる文言修正、本アンケート作成、インフォーマントの属性を解説し、信頼性分析による予備的検証結果と本アンケートの倫理性を確認している。

第7章では、アンケート結果を本モデルで提唱する統合モデルに適用して分析した結果を呈示し、あわせてDiscussionを行った。TAMとFlow Theoryを統合する本モデルを、構造方程式(SEMモデル)を用いて分析した。モデルの適合度の検証を経た後、EIRとDLのそれぞれについて、パスの推定値から、ユーザのBehaviorに最も影響力のある構成概念、並びに、TAMとFlow Theoryそれぞれの外部変数の影響力を導出し、モデルの構成を考察している。

第8章では、前章までの結果と考察を受けて、その理論的発展と実践的応用の可能性について言及した。さらに、本研究の考察が及ぶ限界と、継続的発展についての考察を付して、論文を締め括った。

#### 審査結果の要旨

様々な知的営為が情報化される現代において、図書館が果たす社会的役割は大きい。先進国ではないスリランカにおいては、教育、研究、人材育成の面においても、大学図書館に期待される役割は、先進国のそれよりもはるかに大きく、また、早急な改善が求められている。MENAKA氏はペラデニア大学(スリランカ)図書館の司書として長年勤務する中で、この問題意識を抱き続け、2012年に本研究科に入学し、この問題解決に向けた研究に邁進してきた。

本論文は、その問題解決に向けた取り組みを結実させたものである。

本論文の意義は、社会的影響の伝播を扱うTAMと、心理的な要因によって行動を説明する Flow Theory の統合にある。氏は、大学図書館で勤務し、大学生と多く接する中で、大学生の行動が社会的状況に大きく影響される一方で、その自発的な心理要因に決定的に左右される様子を繰り返し観察してきた。Davis(1985)以降、TAM は様々な分野、様々な社会現象に応用されて理論的發展を遂げてきたが、氏は TAM を図書館利用にそのまま応用するのではなく、さらに大学生との交流で得た経験的傾向を理論モデルに取り入れる。Flow Theory は、心理的要因から行動の選択を説明する理論であるが、Finneran and Zhang(2003)に代表されるように、消費者行動や情報テクノロジーの受け容れにも応用されるようになる。メナカ氏は、この Flow Theory を TAM に統合したモデルを構成し、社会的状況に影響されながらも、心理的傾向に左右される大学生の図書館の利用傾向をモデル化する。このような形で図書館利用の実態を明らかにする点が氏のオリジナリティである。分析の結果、EIR、DL 共に社会的影響と心理的要因の双方の影響が有意に大きいことが示された。また、DL においては、EIR よりも心理的要因が大きいことが確かめられた。この知見は、DL の整備においては、利用者側の視点に立ち、使う楽しみを享受しやすいシステム作りによりシフトして注力する必要があることを、具体的指針として与えるものである。氏が導いた理論モデルは、理論的貢献もさることながら、図書館改革の実践的提案を含んでおり、理論、応用の両面において、意義深い論考となっている。大学図書館で公開されている電子資料や電子図書館を有効に活用することを通して、スリランカの大学図書館がさらに発展することが期待される。

氏は3年間の在学中に、学術論文3本、国際学会発表5回を重ね、本論文の作成に至るための論考を積み重ねてきている。スリランカ国内の大学図書館・専門図書館の司書にアンケート調査を行い、図書館の運営、電子資料の保存、作成、公開、運用、人材育成などの実態を明らかにし(現代社会文化研究 55、2012)、スリランカの図書館の電子化をテーマにしたレビュー論文を記して、現代のスリランカ図書館の問題整理を行った(現代社会文化研究 57、2013)。また、スリランカと日本の大学生の大学図書館利用の比較(SLJCR, 2013; NACLIS, 2013)を行って、本論文の調査研究の必要性を説いている。さらに、本論文で展開した理論の簡易モデルを作成して、バリエーションの有効性と妥当性を分析した論考(現代社会文化研究 59, 2014; ICSS, 2013; ICoLIS, 2014; SLJCR, 2014)を発表しており、検証を積み重ねた結果が、本論文でのモデル作成に結びついている。このように要所を押さえた周到な予備的論考が、本論文に厚みのある考察をもたらしている。

以上の内容を慎重に審査した結果、スリランカの実状をふまえた上で大学図書館の問題を明らかにしている点、所蔵資料の電子化とその運用、スタッフ養成、活用度向上など、図書館が抱える現代ならではの諸問題に対する改善法を呈示している点、TAMとFlow Theoryの2つの理論を統合した理論モデルを提唱し、その有効性を分析的に実証している点、理論のみならず、実際の図書館利用を踏まえた実践的考察を行っている点を評価し、本論文を博士(学術)の学位を授与するに十分な水準に達しているものと認定した。